
使い魔になれ!?めんどくせー・・・

ムジコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔になれ！？めんどくせー・・・

【Nコード】

N1915U

【作者名】

ムジコ

【あらすじ】

目標もなくただ、だらだらと日々を過ごしていた主人公、有馬恵斗は神のドジにより突然死んでしまう・・・チートな能力をもらいゼロの使い魔の世界に召喚された恵斗ははたしてなにをするのか・・・

・ 主人公最強物、原作ブレイクは・・・するかもしれませんが

この作品は処女作です、アドバイスなど意見があつたらぜひおっしゃってください、作者はガラスのハートですのであまり苛められると泣いてしまいます。

です！よろしくお願いします。 (o) (o)

第1話 転生（前書き）

どうも！初めまして！！ムジコです、この作品は主に作者の自己満足とノリで書いていますので不愉快な思いをされるかもしれませんが・・・

その時はスイマセン（T T）ではっ！記念すべき第1話転生についてです。

どうぞ！！

第1話 転生

- 自宅 -

俺の名前は有馬恵斗、どこにでもいるような平々凡々な高校生だ。今年の受験にそなえて勉強をしているが、しかし・・・

「退屈だ・・・」

そう、退屈なのである。

そう良い大学に行くわけでもないのではっきり言って勉強しなくても大丈夫なのだ。

もう少しレベルの高い所も狙える、と言われたが別に行きたくて行くわけではないので別に構わない。

親に行けと言われたから行くだけなのである。

「つまらないな・・・」

周りの奴らが自分の夢を語っていたが・・・

俺にはそういうものがまだない。

まだ、つと言っても見つかるかさえもわからない。

最近は何も考えずにアニメをみたりゲームをしたりしている。

ちなみに好きなゲームは種類がバラバラであり、アクション物、RPG物、ADV物などさまざまだ。

おっと、少し脱線したな、まあ要するに今やることがない状態なのだ。

「買い物にでも行くか・・・」

やることもないので本屋にでも行って時間を潰そうと思う。

……徒歩移動中……

「着いたな・・・」

こちらで一番大きな本屋、まあだいたい物はここにあると思う。
場所も近いので良く利用している。

さて、何か目ぼしいものでもあるかな。

「参考書、はいらないか・・・新刊出てるかな・・・」

新刊とは俺が買っている漫画のことだ、内容は・・・まあ説明が面倒くさいので伏せておく。

「無いな・・・帰るか」

欲しいものがなかったので早々に帰路に着く。

「飯までは・・・あと30分　　くらい余裕があるな」

俺としては部屋で漫画を読んで時間を潰したかったのだが・・・
まあしかたがない、たまには遠回りして帰ってみるか

……徒歩移動中……

「んっ？あれは・・・」

ふと前を見ると子供がいた、ボールを持っていることから大方遊んでいて今帰る途中なのだろう。

「俺にもあんな頃があつたのかな・・・」

俺は幼少時代あまり友達が多い方ではなかった。
まあ今もだが。

理由は主に父親の転勤などさまざまだ。

今前にいる子供にはもっと楽しく生きていつて欲しいものだ・・・

「まあいい、早く帰ろう」

そう言つて歩を進めようとしたそのとき、

「アレは・・・ッ!!マズイ!!!!」

猛スピードで突っ込んでくる車が、あのままでは子供が引かれてしまつ、そう思つたときにはもう体が動いていた。

「クソッ!!間に合えッ!!」

そう言つて俺は子供の手を引っ張る

(よしっ!!これで!)

ドンッッ!!!!

そこで俺の意識は途絶えた・・・

「ん・・・ここは・・・」

そう言つて目を覚ました俺は辺りを見渡す。

「どこだ?ここ・・・」

見渡す限り白、白、白、建造物も住宅も草の木1本すら無い。

「マジでここどこ？」

1人呟くが返事は帰ってこない。

「誰かいませんか？」

結構大きめの声だったのだが・・・

「たしか俺は・・・家に帰る途中で・・・子供がいて・・・その子が車に引かれそうで・・・それを助けようとして・・・」

「代わりにお主が死んだんじゃ」

「ッ！！！！！誰だ！！」

俺が振り返るとそこには白い髭を蓄えた爺がいた。

・・・なんつーかFFの召喚獣のラムウに似てんな。

「おいじいさん、あんた誰だよ」

「ワシか？ワシは神じゃよ」

「頭打ったか爺・・・」

「何を言うか！！れっきとした神じゃ！神様なんじゃ！！」

なんだこの爺・・・まあいい、今話せる奴はこの、神（自称）しかないわけだし・・・話を聞いてみるか。

「おい爺、ここはどこだ」

「だからワシは神じゃと言うとるのに（ブツブツ

まあいいわい、ここは天界と人間界の狭間じゃ」

「どういうことだ？」

「つまりお主は死んだんじゃよ、車に引かれて」

やっぱりか・・・こんなとこ地球上に無いしな、まあいい、それよりも・・・

「爺、あの子供は助かったのか？」

「うむ、お主のおかげでピンピンしとるよ」

良かった・・・少なくともあの子供は救えたのか・・・

「それでそのく大變言にくいことなのじゃが」

「んだよ爺」

「怒らないで聞いてくれると助かるんじゃが・・・」
「なんなんだ？急に？」

「早く言いやがれ、早急に、今すぐ」

「実はな？お主は死ぬはずではなかったのじゃ」

「・・・・・・はあ？」

なに言ってたんだこの爺は、実際俺死んでんじゃねえか

「どう説明してよいものか・・・実はな？ワシが書類を整理しているときに茶を溢してしまってたな？お主の寿命の数字を汚してしまつてのう、まあそのままポツクリと逝ってしまったわけじゃ」

「・・・・・・はあ！！！？？」

なに言ってたんだこの爺は、じゃあ俺が死んだのこいつのせいかな！？

「ちなみにあの子供はお主が助けなくても死ななかった、擦り傷位で助かったであらう」

「・・・おい、ちなみにお前のミスが無かった場合俺はどのくらい

生きれた」

返答によつてはこのクソ爺ただじゃおかねえ・・・

「うむ、軽く60年は生きれたのう、ゴメンね」

よし殺す

「まつのじゃ！頼むから！怒らないでといったじゃろうが！ああ！
！待って！拳を振りかぶらないで！！待ってく」『ドゴオオ！！』
うぶおお！！」

「辞世の句は遺したか？クソ爺？」

もう殺す、マジで殺す、老人虐待とか言ってる場合じゃねえ。

これはもうアレだな、世界の為だ。

「まつのじゃ！代わりといつてはなんじゃが、お主をどこかに転生
させよう！

ワシはそのためにきたのじゃ！！」

転生？・・・どういうことだ？

「・・・おい、転生ってどういうことだ、それにどこに転生させる
んだ」

「転生とは、まあ読んで字の如くじゃな、場所は・・・秘密じゃ」
『スッ』ああ！！嘘！まつのじゃ！言うから！拳を振りかぶらない
で！！・・・お主の転生先はゼロの使い魔の世界じゃ！！」「二
次元じゃねえか・・・そんなことできるのかよ」「できるっつ！
神じゃからな！」

まあいい、神をボコるのは後にして、・・・ゼロの使い魔か・・・
確か主人公が髪がピンク色の奴に召喚されてハーレムつくるやつか？
暇潰しに読んだけどあんま覚えてねえな・・・
魔法使ってドンパチやるってのはギリ記憶にあるが・・・

「おい爺、そんな死亡フラグ満載のところなんか行きたくねえぞ、
場所を替えろ」

「無理じゃ『スウ』待って！殴らないで！ちゃんと力は与えるから
！！」

力？まあ確かに自分の身を守るくらいはできないとだめだよな・・・

「力ってどんなんだ」

「たとえばあれじゃな、お主がよくやっていたFFの魔法が使えたりする奴じゃな、あとは身体能力の強化とかじゃな」

FFの魔法か・・・確かにアルテマとかぶっ飛ばしてみたいとは思
ったことはあるしな。

何より・・・面白そうじゃねえか・・・

「爺、どんくらい力は頼んでいいんだ？」

「まあもともとワシのミスじゃからの、できる範囲では叶えてやれるぞい」

そうか・・・なら

「まず、FFの召喚獣、魔法、技、武器をすべて使えるようにしろ、
武器は俺が願ったら出てくるようにしろ、後ドラクエの技、魔法ハ
ガレンの錬金術、ナルトの忍術もな写輪眼もわすれんなよ、もちろ

んノーリスクでな、身体能力は・・・そうだな、ネギまのラカンの5倍もありやいいや、精神力だったつけ？
めんどくせーからそれ無限で」

「・・・・・・・・ずいぶんとチートじゃな・・・・・・・・」

「うるせーな、死にたくねえんだよ」

ホントにな転生してすぐ死にましたーじゃ話にならんからな。

「ちなみにお主はサイトと共に召喚される予定じゃからな」

「はあ！？召喚！？俺にあのピンクの奴の相手をしろってか！？勘弁してくれよ・・・じゃああの使い魔のルーンの洗脳効果消してくれよ」 「うむ、もとからそのつもりじゃ」

助かった・・・正直あんなプライドが高い奴は嫌いなんだよ・・・
まあそのへんはサイトに押し付けろか

「んじゃあもういいぜ、早く送れ爺」

「最後までワシを神と呼ばんのじゃな・・・（泣）」

「うるせーな、早くしろよ」「では・・・むんっ！」

『パカッ』

（はあ！？俺の下に穴が！！落ちる！！）

『ヒュウウウウウウ』

「覚えてろよ！！クソ爺イイイイイイ」

「やれやれ、やっと行きおったか、ううワシ神なのに・・・最後まで爺扱い・・・まあ頑張るのじゃな、恵斗よ・・・」

第1話 転生（後書き）

どうでしたか？

作者の書き方に至らぬところがあればぜひ、アドバイス、意見をしてください！！

酷評は・・・勉強させてもらいます。 (T□T)。

オリ主設定（前書き）

今回は主人公の設定です。今後いろいろ変わってくると思いますが、とりあえずです。

オリ主設定

主人公設定

名前：有馬恵斗^{ありまけいと}

容姿：容姿は上の下、比較的イケメンの部類に入る。黒髪、黒目の典型的日本人、髪はそれなりに長い。身長は177？ある

性格：基本的に器用なので なんでもできる。面倒くさいことをあまり好まず、いつもだらだらしている。しかし、仲間や友達がピンチになったりしたら、思わず助けてしまう。

傲慢な考えやプライドが高い奴はあまり好きではない。（初期ルイズなど）か弱い者は助けるべき、という考え方である。

あまり原作には関わらず傍観者の位置に立とうとするが、どんどんまきこまれてしまう。

能力：FFの魔法、技、武器を扱える。武器は自分が必要な時に出すようにしている。ドラクエの技、魔法を扱える。ハガレンの錬金術、神様のオマケで対価をあまり必要としない。

ナルトの忍術、写輪眼、万華鏡写輪眼を使える。もちろんノーリスクである。

身体能力はネギまのラカンの5倍、精神力（この場合ナルトのチャ

クラや魔力なども精神力と同じとする）は無限。

主人公は基本的にサイトやルイズを見守るスタンスで構える。しかし、降りかかる火の粉はきちんとはらうので、どうしても目立ってしまう。本人はあまり目立ちたくはない。

オリ主設定（後書き）

まだヒロインなどは未定ですので、アドバイス、意見がありましたらよろしくお願いします。

ルイズはサイトとくつつけようかな〜と思っています。

まあまだ未定ですが・・・ではっ次回もヨロシクです!!!

第2話 召喚（前書き）

第2話です！！

学校の授業サボりつつ書きました！！

ダメですね、いけませんね（笑）

それでは、どうぞ！

第2話 召喚

「トリスティン」

「……あんた達だれよ」

轟音と共に現れた少年2人にむかって桃色の髪をした少女は訊ねていた。

「おいっゼロのルイズが平民を召喚したぞ!」

「さっすが期待をうらぎらない!」

「そこに痺れる!憧れるう!」

「うっうっうるさいわよ!!ちょっと失敗しただけよ!!」

（もう!!なんで人間なんか出てくるのよ!しかも明らかに平民っぽいし……私はもっと凄い使い魔を召喚したかったのに!!）

「ケイトside」

くっ!どうやら着いたみたいだな……

ちゃんとサイトもいるみたいだな、そうでなきゃこまるが……

気絶しているみたいだが……まあすぐに起きるだろう。確かこの後は

……なんたらかんたらサーヴァントだったか?

桃色とキスしなきゃなんのか?

それは嫌だな……怪しまれるのも嫌だし、お決まりの台詞を呟いて

おくか……

「ここは……どこだ……」

とりあえず周りのガキ共に嘗められるのも癪なので少々殺気を込めて呟く。

「ツツツ……!!」

ん？なんかハゲがスゲー反応したな……

ああ、あれか、ツルツパゲールさんか。

あのハゲは比較的好きな部類に入るんだよな。

「うつ………ん？」

サイトが起きたみたいだな

「うお!!どこだ!?!ここ!?!」

面白い位混乱してんな……まあ俺も原作知らなかったらこんな風になつてたと思うが。

＼コルベールside＼

ミス・ヴァリエールが人間を召喚した。

しかも2人も！これは前例がないな……

そんなことを考えていると少年が殺気を放っていた、もう1人の少年は気絶しているから殺気を放っているのはあの髪の長い少年の方だろう。

私は思わず身構えてしまったが……

攻撃してこないところを見ると警戒しているだけだろう……

もう1人の少年も目を覚ましたみたいだしこのまま儀式を続けることにしよう。

side end

ケイトside

おつハゲが構えを解いたな、危険性無しと判断したか？今の殺気に気付いたのはあのハゲ位か？

まあ他にもいそうだな。

「コルベール先生！召喚をやり直させてください！！ちょっと失敗しただけなんです！！お願いします！！」

「ダメです。これは一生を添い遂げる使い魔を喚ぶ神聖な儀式なのです。」

「でもっっ！！！」

「しつこいですよ、ミス・ヴァリエール、この使い魔召喚が失敗したら退学なのですよ？早く契約しなさい。」

おうおう俺達は蚊帳の外だねえ、こういう人を人とも思わない態度がムカつくんだよ。

まず、俺達に聞くだろ？普通なら。

「…感謝してよね、平民が貴族にこんなことされるなんて、ふつ普通ならありえないんだからね！」

うるせーよボケが、と内心思いつつさっきからギャーギャーうるせえサイトを見る。

うわっキスされそうになって固まってやがる。
御愁傷様……

――――
終わったみたいだな……

長つたらしい呪文はよく聞こえなかったがまあ終わったんだろう。
次は俺か…… ああやだやだ

「……………ん？」

なんか手が熱いな……

もしかして……

その瞬間手が燃えるように熱くなった。

「うあつぢい……………！！！！！！」

サイトと同時に俺も叫んだ。ヤベーだろこの熱さは！！ナニコレ！
？もしかして俺の手炒められてる！？

おいこれ我慢できねーぞ！

「ルーンが刻まれているだけよ、すぐにおさまるわ」

うるせーよクソピンク！！

尋常じゃねえんだよ！

てめえ焼いてやろうか？

メラゾーマしてやろうか？このやろう！！

「契約もせず2人ともルーンが……………これは興味深い……………」

おいハゲこらあ！冷静に分析してんじゃねえよ！！
クソッ！キスされなかったのはいいがこれは想像以上だ！！

———
やっとな治まった……（泣

ああ熱かった……

サイトも治まったみたいだな……

「ふむ、2人共同じルーンですか、しかも見たことありませんね……ちよつとスケッチさせてください、………さあっこれで召喚の儀式は終了です。学院に戻るとしましょう。」

ほかのガキ共が各々に帰る準備をしていく。

「あんた達、名前は？」

「えつと……平賀才斗だけど、なあここどこなんだ？おれは日本にいたはずなんだけど……」

「あんたは？」

おいおい、サイトの質問をナチュラルに無視かよ、こいつちゃんと聞く気ねえな……まあ一応自己紹介はしておくか。

「有馬恵斗だ」

「アリマにヒラガ……変な名前ね」

よけーなお世話じゃボケえ、さつさと先に進ませろってんだ。

「おいルイズ！お前は歩いていけよ！なんせゼロなんだから！」

「そのの平民と一緒にな！！なんせあいつは『フライ』も『レビテ

「ション」も使えないゼロなんだから!」

おいおい言い過ぎじゃね? ガキの苛めつてのは怖ええなあ、ガキは加減を知らんからなあ。

当のルイズは………

うわっ怖っ、超キレそうんだけど、サイトは…

「人が……飛んでる……」

意識がどっか行つてんなあ まあ予備知識なしにこれはビビるよなあ

やれやれ、これからどうなることやら………

第2話 召喚（後書き）

召喚完了です

次回は3日以内には書きますので、みてくれる人はとても感謝です
！！

アドバイス、意見などがありましたらどしどし来てください！

第3話 説明（前書き）

第3話です

前書きは…特にありません!!

第3話 説明

くケイトsideく

さて、今俺とサイトは『御主人様』であるルイズに連れられて歩いているわけだが…

「なあなあ」

この後の流れはなんだったけな……

こんなことになるならなにもつと原作読み込んでおくべきだったなあ。

「おーい」

とりあえず使い魔の役割を説明、だったかな……

洗濯とかはサイトに押し付けるとして……

「おいつてば!!」

あー、さっきからうるせーな、俺あ考えごとしてんだよ！

「んだよ」

「なあなあここってどこなんだ？俺は日本にいたはずなんだけど…お前はどこから来たんだ？」

「ここがどこなのかは知らん。俺もお前と同じで日本にいた、だが気付いたらここにいた、それだけだ」

多少嘘を交えて話す。説明するのもめんどくさいしな。

「そっか……でも同じ境遇の人がいて良かったよ。
あつ俺は平賀才人、お前は？」

「有馬恵斗だ」

「うんっ、よろしくな恵斗！」

「ああ、こちらこそ、だ」

まあこいつは結構いいやつだからな、仲良くなっというて損はないだろう。

「ちょっとあんた達！！早く来なさいよ！！使い魔のくせに御主人様を待たせるとはどういうことよ！！」

おいおい怒りの沸点低すぎだろ……

癪癪持ちか？ああやだやだ。

――――
で、ルイズの部屋に着いたわけだが……

急に拉致られた俺達は当然混乱してるわけで（サイトだけ、俺は混乱しているふりである）疑問が浮かんでるわけである。

「なあいい加減ここがどこなのか教えてくれよ。俺帰りたいんだけど。」

「御主人様に向かってその口の聞き方は何なのよ！！ここはトリステインにあるトリステイン魔法学院よ！！
わかった！？」

「トリスティン？……どこだよそこ」

「どこの田舎者なのよあんた達……トリスティンも知らないなんてありえないわよ……はあ、なんでこんな奴ら召喚しちゃったのかしら……」

サイトとルイズが会話しているようだが……

まあここがどこかわかってる俺には関係ないが、それにしてもムカつくピンクだな……

「あつ！……！！」

ん？なんだ？

「月が……2つ……」

ああそのことが、つうかすぐに気付けよ……

「はあ！？月が2つなんて普通のことじゃない、あんたなに言ってるの？」

「俺達がいたところは月は1つしかないんだよ！なあ恵斗！」

げっ！俺に振るなよ、キラーパスにもほどがあるだろ……

「ああそつだな、少なくとも地球に月は1つしかなかったな」

無難に返す俺、うん、完璧だったな。

「じゃあこっちは……地球じゃないのか!？」

異世界なんだよ、とは言えないしなあ。存分に悩みたまえ。

「あんた達さっきから何言ってるのよ」

「だから！俺達はだなあ！」

サイト説明中……

「つというわけなんだよ!!!」

「そんなの信じられるわけじゃないじゃない」

おおつ 速攻で否定されたよ。まあ仕方ないか、こんなこと言う奴は頭おかしいと俺でも思う。

「おい、使い魔ってのは具体的に何をすればいいんだ？」

いい加減先に進みたいんだよ、さっさと説明しろ。

「御主人様に向かってその口の聞き方は何なのよ!!」
それ2回目っ（笑）

「まあいいわ……まず御主人様との感覚の共有よ」

「.~」

「つまりあんた達の見たものが私にも見える、みたいだなことよ。」

「見えているのか？」

「……………見えないみたいね、次に秘薬探しよ、秘薬つてのは硫黄とかコケとかね」

「硫黄やコケはわかるがこの辺の地理がわからん、無理だな」

「なによ、使えないわね」

イラッ!!

ヤベーよ超ム力つくんだけど、やっぱり初期のピンクはイラつくな。

まあいい、我慢我慢……………

「最後に！これ1番重要！、使い魔は命を懸けて御主人様を守ること！！……………なんだけど……………無理ね所詮平民じゃ……………」

あーもう、いちいちム力つく言い方だなあ！！

「まあいいわ、あんた達には掃除や洗濯等の雑用をやってもらっわ、もう疲れたから私寝るわ」

「あっおい！俺達はどこで寝ればいいんだよ」

サイトはルイズの指した方を見る、サイトよ…………その質問は地雷なんだよ…………

「まさか…………床！？」

「当たり前よ使い魔なんだもの、ああせめてもの情けよ、はい『ぽいつ』」

サイトはルイズから受け取った毛布を持ちながらわなわなと震えている。

「じゃあ寝るわ」

そういつてルイズは服を脱ぎ出す。

「おっおい！お前男がいるのに何脱ぎ出してんだよ！！」

まあ確かに、俺は恥じらいがない女は好きじゃないし……どうでもいいが。

「男？あんた使い魔でしょ？使い魔に見られたってなんとも思わないわよ」

「なっ！？」

サイト驚愕！！！！って感じだなあ

「あつあとこれも洗つといてね」

おいおい下着もかよ、原作に忠実だな、実際見ると引くわー、男に平気で下着渡す女。

「ZZZZZZ」

もう寝てやがるよ。

「サイト、とりあえず俺達も寝よう、毛布はお前が使っていていいぜ、俺よりお前の方が薄着だからな」

そう言つて準備をすると何か声が聞こえてきた、何だか聞いたことある声だな…まさか!!

『そのまさかじゃ』

「んだよ……爺か…今俺は忙しい、後にしろ」

うつとうしい…早くいろんな呪文唱えてえのに。

『そう邪険にするでない、ワシが来たのはお主の能力について話そうとするためじゃ』

「俺の能力？制限をつけるとか抜かしやがったらぶっ殺すぞ」

『違う、むしろその逆じゃ、ワシからのサービスじゃよ』

サービス？…なんだそれ。

「具体的には？」

『まず、錬金術じゃが本当は等価交換じゃがあまり代価を必要としないことにしたぞい』

「どづいつことだ」

『つまりその辺の石ころを金に変えられるようになる、みたいなことじゃ』

マジか!!…ってことは金には困らねえな……

『後この世界の文字を読み書き出来るようにしたぞい』

それも助かるな……、一応本とか読めるようになったしな……

『まあそんならいじゃ、後はワシがいじくなくても十分にチートじゃからな、じゃあワシはもう行くぞい』

「ああ、助かった。それじゃあな爺」

『グスンっ最後まで爺呼ばわり……』

「……………消えたか、まあいいとりあえず魔法だな、じゃあまずファイガ」
「ッドオオオオオオオン！！」

「……………やばくね？」

おいおい、威力ありすぎだろ……
今結構軽めにやっただつもりなんだが……
まあいい次は武器だ……

（じゃあ……俺が好きな『ライオンハート』こい）

——ブウンッ

おお！！キタ！！超力ッコイイ！！おっと切れ味は……

——ストン

……嘘だろ？岩が豆腐みたいに切れたぞ…
ああそうか、ガンダールブの力もあるもんな。

― 1 時間経過……

あれからたくさん試したが……、いやはや自分でやっというてなんだがデタラメすぎるな…

岩殴ったら吹き飛ばし、ちょっと全力でしたらめっちゃ早く動けるし…… 瞬動もらくらくできたぞ。

写輪眼もできたしな。万華鏡写輪眼はさすがに疲れたが…

まあ今日はこれまでにして戻るとするか……

「……………迷ったアアアアアアアア！！！！！」

クソッ！！迷った！……………もういいや、外で寝よう……（泣

第3話 説明（後書き）

後書きも…特にありません！！

第4話 朝食&授業（前書き）

いや〜

すいません、随分と遅くなっちゃいました（ハ・ハ・ハ）

あのですね、テストと言う名の悪魔がですね、こちらに接近してたわけですよ。

結果はまあ…察してください…

第4話 朝食&授業

どうも、有馬恵斗だ。

俺は今猛烈にピンチを迎えている。

「ルイズの部屋は………どこだアアアアア………！」

ヤベーよ、絶対迷うだろうなあと予想していたから早めに起きたのに……

着く気配すら感じられねえよ……

なんか同じところをグルグル回ってるきもするし……ああどうすっかなあ、とりあえず朝食までには合流しないとあの癪癪持ちがキレるだろうなあ……

「はあ……どうすっかなあ………んっ？」

俺がトボトボと歩いていると前にメイド服を着た黒髪ショートの子が歩いていった。

あれっ？もしかしてあれシエスタじゃね？

チャーンスッ！！ルイズの部屋教えてもらおうと。

「すみませ〜ん、そのメイドさ〜ん」

俺が呼ぶとシエスタはくるっとこっちを向いた、おお！出るここは出てるし……可愛い子だなあ……

「はい、どうなさったんですか？」

っていかんいかん、ルイズの部屋を聞かなきゃな。

「ごめんね、急に呼び止めちゃって、聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「はい、私に答えられることでしたら構いませんよ」

おお！ええ子やあごつつええ子やあ…もうマジであれだな、その辺のクソ貴族よりよっぽどいい子だよ。

「あのさ、ルイズの部屋がどこにあるかわかるかな？ちょっと迷っちゃってさ」

「ミス・ヴァリエールの部屋ですか？…ということはあなたが召喚されたっていう2人の平民の……」

「うん、有馬恵斗ってんだ。よろしく」

「アリマさんですか「ああ恵斗でいいよ」ではケイトさん、こちらです」

「ありがとう、助かるよ」

まして助かった……、あの2人が起きてなきやいいけど……

――――――徒歩移動中……――――――

――――――はい、こちらですよ――――――

「おお！ありがとう、マジでありがとう」泣

「はい、これくらいのことでしたら」

「あつ！メイドさん！名前教えてもらっていいかな？」

知ってるけど、この時点で知ってたらおかしいもんな。

「はい、シエスタといいます」

「じゃあシエスタ、またね、もし俺が手伝えることがあったら言うてね。ぜってえ手伝うから」

「はい、ありがとうございますケイトさん。それでは……」

ええ子やあ…もうほんまごつつええ子やあ…

つていかんいかん、トリップしてる場合じゃない。

確か洗濯しろっていったなあのお癪持ち。

うしっ！サイト起こしてやらせるか！

ーガチャ

……… 2人とも爆睡ですか、ああそうですか。俺は随分と前に起きたつーのに何ですかコレは？

あんのクソピンクふつかふかのベットで寝やがって…

「おいサイト、起きろコラ、朝だ」

そっいつて俺は寝ているサイトを蹴る。

「うわあ！なんだ！？」

慌てて起きたサイト、なんかムカつくのでとりあえずもう1回蹴つとく。

「痛い！痛いって！なんで蹴るんだよ！」

「いんや？俺は起きてたのにグースカ寝やがってこの野郎……ちょっただけなら蹴ってもいいんじゃないかね？とか思ってたねえぞ？親切心のだよ親切心」

「何がちよつとで親切心だアアアア！！今もまさに現在進行形で蹴ってんじゃないかアアアア！！」

「おお悪い悪い、いや俺の右足が言うことを聞かなくてな？心の中では『やめろ！！やめてくれ！！』ってなってるんだぜ、今も必死に抵抗中なんだ」

「なんだ つじゃねえエエエエエ！！てめえ自分の顔鏡で見てもやがれ！！嬉々としてんじゃないかねえかアアアアア！！！！」

閑話休題…

「で？なんなんだよ」

こいつ昨日のことすっかり忘れてやがるな……

「そのピンク色が洗濯しろって言ってただろうが…ほらっさっさといくぞ」

「ああそつえば……はあ、なんで俺がこんなことを……」

「俺だっておんなじ気持ちだよ、だがな、そのピンク色がヒステリー起こしてグチグチうるせえこと言ってくるのと素直に洗濯して

穩便に事が終わるのとどっちがいいんだ？」

「ああ…それもそうだな」

うしっ！行くか！ちなみに下着、フリフリしたものなどとても洗濯しにくいものをサイトに押し付けたのは言うまでもない。

………

………

………

………

…

さて、洗濯も終わったし後はこのピンクを起こすだけなんだが……

「ZZZZZZ」

さつき俺とサイトがあんだけ騒いだのにまだ寝てやがる…爆睡してるのにも程があるだろ…

「おいサイト、あのピンク起こしてこい」

「ええ！！なんで俺が！」

「うるせー行け、癪癪起こされたら困るし俺はガキの寝顔見てもなんとも思わんからな、お前にとっては役得だろう。だから…行け」
「うう……、わかったよ……」

—— サイト、ピンクを起こし中

「あんだ、誰よ」

お前が召喚した使い魔だつつつに……まあいい、さつさと俺は事を進めてえんだよ。

「おい、もう時間じゃねえのか。さつさと起きろ」

俺がそう言つとどんどん機嫌が悪くなる癪癪持ち。

「っ！！はあ……、なんでこんな奴ら召喚しちゃったのかしら」

お前が勝手に召喚したんだろうが…

「まあいいわ、洗濯は…ちゃんとしたみたいね。じゃあ服を着せて」

「そんなくらい自分でやりやがれ」

「貴族は僕に身の回りの世話をさせるものなのよ！！！！早くしなさい！！！！」

自己中すぎるだろ……なんなんだ？こいつ、脳ミソお花畑なのか？

「はあ…おいサイト、行つてこい」

「また俺！？」

「女の着替えを手伝うなんてギャルゲーでもそつないことだぞ、目の保養とでも思つてやつてこい、俺はあれには欲情しないからな、目の保養にすらならん」

「お前言つてる事酷すぎるぞ……まあいいよ…やつてくるよ…」

やっと行ったか。着替えの手伝いなんてまっぴらごめんだ。ロリコンは喜ぶだろうが生憎と俺はノーマルだからな。

——
ルイズお着替え中……………

「さあ、準備も終わったことだし、朝食を食べにいくわよ！」

「へい」

やる気のない返事をする俺とサイト、うん、息びったりだ。

——ガチャ

「はあゝいルイズ、おはよう」

扉を開けるとそこには褐色の肌色をしたボインの姉ちゃんが、たしか…キュルケだったか？おいおいサイトよ、ガン見しすぎだろうお前。

「……………おはよう」

うわー、嫌そうな顔してんなー、ああそうか、犬猿の仲ってやつなのか。そう言えばそうだったな。

「ねえルイズ、あなたの使い魔ってほんとにソレなの？」

人をそれ扱いですか……………

「だからなんなのよ……」

「ぷっ！あっはっはっは！ほんとに平民を召喚したみたいね！さすが『ゼロ』のルイズは違うわね〜」

「~~~~っ！！あああ、あんたは何召喚したのよ！！」

「私？私はねえ…おいで！フレイム！」

キュルケが声を掛けると真っ赤なでかいトカゲが現れた。ほっ、結構でかいな。

「それってサラマンダー！？」

「ふふっそうよ、私にふさわしい使い魔が召喚できたわ。どこかの誰かさんと違ってね」

「っ！！もう！！2人とも！行くわよ！！」

そうよ言っ て俺達を連れて行こうとするが…

「ちょっと待って！あなたたちの名前はなんて言っ の？」

あん？ああそういや自己紹介してなかったな。

「平賀才人です」

「有馬恵斗だ」

「ふうん、変な名前ね」

お前らはそればっ か…

「まあいいわ、私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー、『微熱』のキュルケよ、よろしくね、キュルケでいいわよ」

長っ！！名前長っ！！キュルケとツエルプストーってところしかわからんぞ…

「ああよろしく頼む、何ツエルプストーに色目使われて鼻の下伸ばしてんのよ！！早く来なさい！！」……癩癩持ちのご主人様が怒ってるんでね、もう行くわ、ほれ、サイト行くぞ」

「あつ、ああそうだな、それじゃ」

タッタッタッタ

キュルケside

ふうん、サイトってほうは鼻の下伸ばしてたけどケイトは何とも思っていないって感じだったわね…
顔も良かったし…面白いじゃない…ヴァリエールの使い魔…どう奪ってやるうかしら」

side end

ケイトside

さて、俺達はいまルイズに連れられて食堂にきたわけなんだが…

「でけえな……」

そう、でかいのだ。豪華絢爛という言葉がこれほど似合うとはな……

「ここがアルヴィーズの食堂よ、ほんとに平民なんかが入れるような場所じゃないんだから、感謝しなさいよね」

「で、俺達の飯は？」

だからサイトよ、駄目なんだってその質問は……

「んっ」

ルイズが指をさした方向を見ると固そうなパンとスープが……
まじで犬だな……

「……俺あいらねえ、サイト、やるよ。俺厨房行ってくらあ」

「えっまじで！？助かるぜ！！」

「あっちよつとあんた！……もう！なんなのよ！！」

後ろでピンクがごちゃごちゃ言ってるが気にしたら負けだ。シエスタいるかな？いたら助かるけどな

――厨房

厨房に着いたわけだが……あついた！

「おーい、シエスタ」

おっ！気づいてくれたみたいだな。

「ケイトさんじゃないですか！どうなさったんですか？」

「いんやあ、ご主人様がふざけた食事しかくれなくてね、さすがに耐えられねえから賄い飯かなんかもらえないかなあ〜と思って」

俺のプライドがね……邪魔するのだよ。俺あ自分で採った食材ならゴキブリでも食って生き残る自信はあるがね…人から貰ってあの食事はいやなんだよ……

「あつ、はい。私達給仕のご飯でしたらさしあげれますよ」

「ホント！？助かるよ！！」

うつしやああああ！！ケツケツケ、サイトよ悪いな。さ〜てご飯にありつくとするかなあ〜。

ーコトッ

「すみません、簡単な物しかありませんでしたが…」

「いやいやいや、まじで助かった、ありがとう！！」

出てきたのはパンに温かいスープとサラダが少々、うん、向こうと比べると天地の差だな。

「ああ〜うまかったよ、ありがとうシエスタ！」

「／／／いっいえ／／」

可愛いな〜この初々しい感じがたまりませんな〜、
ってヤベエー！もう朝食の時間が終わる！！いやだ！あの癩癩の相
手をするのはいやだ！

「じゃあ俺もういくな、じゃあなシエスタ！」

そう言って小走りで厨房を出る。

「あんたは一体何してたのよ！！もう少しで授業に遅れるところだ
つたじゃない！！」

「ハイハイドウモスイマセンデシタ」

「あんた喧嘩売ってんの？」
うっさいな、じゃあどうせーっちゅうんじゃ。

「おい、ケイト、ルイズ、もう授業が始まりそうだぞ」

「何ですって！？もう！！あんたが遅れたからでしょうが！！」

まてまて、お前が喋ってなかったらもつと余裕だったよ…

―教室

わいわいと思い思いに喋っていた生徒はルイズが教室に入ってから
はクスクスと噂話を始めた。

俺はこういう態度が嫌いなんだよなあ、団体が個人を責める、うん、
クソだ。

「おい、俺達はどこにいればいいんだ？」

「あんた達は使い魔のスペースにいなさい……」

意気消沈ってやつだな。

つつかどんだけだよ……カエルにでかいトカゲに目玉がギョロツと
した生物……
怖ッ！

―ガラッ

うん？先生が来たみたいだな。うわあ……なんか……魔法使い！！って
感じの人だな……

「みなさん、おはようございます。私はシュヴールズ、2つ名は『
赤土』です。これからよろしく願いしますね」

まあ今のところ普通の教師だな……

「皆さんはサモン・サーヴァントを無事に終えることができたようですね。私は皆さんの使い魔を見るのが楽しみなのですよ、…おやミス・ヴァリエール、めずらしい使い魔を召喚しましたね」

あん？…こいつ…もしかして煽ってんのか？…いや、純粹に珍しがつてるだけか？

「やい！ゼロのルイズ！！魔法が使えないからって平民を連れてくるなよ！！」

「ちがうわよ！！ちゃんと召喚したわよ！！」

売り言葉に買い言葉ってやつだな……というかムカつくデブだな…ルイズもムカつくが女の子だからな、まだ我慢できる。だがあのデブは…見ているだけで不愉快だ…

「嘘をつくなよ！！どうせ何もできない平民を金で雇ったんだろ！！」

ープチン

俺は気が付いたら瞬動でデブの後ろに回り込み適当に錬成したナイフを首に突きつけていた。

「！！！！！！ッ！！！！！！？？」

教室は俺が突然デブの後ろに現れたことで騒いでいる。

「おいデブ、言葉に気を付けろよ…誰が何もできないって！？」

「おっおい、なんだよお前、貴族にこんなことして『黙れ』」

「さっきからギャーギャーと…うるせえんだよ…お前これから一言も喋るなよ…喋ったら…頭が胴体とおさらばすることになるぜ…わかったか？」

ーコクコクッ

デブは狂った人形のように首を振り続けている。まあそれなりに殺気出したからな…

「チッ、胸くそわりい」

しまったな…ちょっと目立ちすぎたか？タバサに目をつけられたら嫌なんだが…うわっこっち見てるし…

くタバサ sideく

朝から誰かが言い争いをしていた…私は関係ないから本を読んでいた……

その時使い魔の彼は気付いたらナイフを首に突きつけていた…

…どういうこと？さっきまで彼はそれなりに離れていたはず…魔法を使った気配はなかった……

どうやって回り込んだのだろう…興味深い…

くside endく

「さっ、さて！授業を始めるとします」

そっいつて先生はまず見本を見せた、ほう、鍊金とはああいうもの

か…

ちよつとやってみてえな…

「おい！その教師！」

「はっはい！何でしょう…」

びびられてんな…仕方ないっちゃんあ仕方ないが

「ちとやってみてえんだがいいか？」

「はっはい！どうぞ！」

「ちよつと何言ってるの！？あんたそんなことできるの！？」

「まあ見てろ」

俺は教卓の前に行き石に向かって錬金術をしようとした。ガキどもが平民の癖にだのなんだの後ろでいつている。まあいい、やるか。――パンツ

俺は手を叩き石を錬金しようとした……のだが…

「あつやべっ」

「……………！！！！！！！！！！」

なんと机ごと金になってしまったのだ。やべえなイメージが足らんかったか？

「す、すいませんがコレは…」

「ああわりいわりい、全部金に変えちゃった」

「おい、金だぞー！！ということはあの使い魔はメイジでスクウェアなのか！？」

「しかも机ごと変えたぞ！？あんなの誰もできないぞ！？」

「というか呪文を唱えてなかった…まさか先住魔法！？」

あ~~~~~うつせえなあ！！！！

「わりい戻すよ」

そういつてまた俺は手を叩き机を元の素材に変える。

「ああ、その石ころは先生にやるよ。何もできない平民からのプレゼントだ」

ガキどもを見ながらニヤニヤした顔で金を渡す。こんなもんいらんしな。

「ちよつと！！！！あんたなんでそんなことできるのよ！！！！なんで私に言わないのよ！！！！」

「聞かれなかったからな」

つて、うわぁ超キレてるよ、今にも爆発しそうだぜ。ああ、今から爆発するのか。

「お前…俺と同じ日本から来たんじゃないのか？」

「サイトよ、それは秘密だ」

「では、ミス・ヴァリエール、あなたもやってみてください」

お、惚けていた先生が復活したな。

その瞬間周りのガキどもが危険だのやめてくれたの口々にいい始めた。

ああアレか…爆発フラグか…フバーハでも唱えとくか

―チュドオオオオオン!!!!

爆
発

第4話 朝食&授業（後書き）

次は多分決闘です！

大体が書き終わりましたが今推敲中です！
ではっ（ハ－ハ）／

第5話 決闘―前編（前書き）

サイトどうしようかな

第5話 決闘―前編

くケイトsideく

さて今俺達は『ご主人様』がミスって教室を爆破してくれやがったので大変不本意ながら片付けを手伝っている。

「そっか」『ゼロ』ってそういうことだったのか、魔法が使えないゼロ！いや、納得の2つ名！！」

確かにそうだな、まあ犬扱いされればこういう事を言いたくなるのはわかるが…

「わたくし、ご主人様のために歌を考えました！！」

こいつバカじゃね？普通は逆らったらアウトなんだぞ？

「ほう…言ってみなさい…」

あつやべつ巻き沿いくらつまえに退散だ。

サイトご主人様に歌を披露中……………

「くくく！！ゼロって言った回数だけご飯抜き！！これ決定！！！！もう決定！！！！」

ほれみる、バツカで。

異世界で食料難は死を意味するのによ。

まあ俺は厨房行くからいいけどな

「ええ！！そんな！！嘘です！！ごめんなさい！！」

「うつさいバカ犬！！どっか行つてなさい！！」

え！？までまで、サイト！行くな！！俺が片付ける範囲が増えるだろうが！！

あつ！てめえ！おとなしく教室出てんじゃねえよ！！
少しは粘りやがれ！！クソッ

「……………」

「……………」

急に無言！？対応に困るぜ。

「……………ねえ」

喋りかけんなや！！俺関係ありませんよ、みたいなオーラを出してただろうが！！

「……………んだよ」

「あんたって魔法使えるの？」

ええ、どうしよう…使えるって言った方がいいよな…

「ああ一応な」

「ってことは…あんたメイジなの？」

「そういうことになるんじゃない」

一応メイジで。

「あんたも心の中でバカにしてるんでしょ…」

なにが？ああコレ自虐モードか…
チツ…うつとうしいな…

「私がいくら魔法を唱えても爆発ばかり…、ついたあだ名は「ゼロだったか？」っええそうよ、私なんかいくら頑張ってもゼロなのよ！…使い魔もよくわからないし…他の勉強は頑張ってるけど…魔法だけが使えない「ストーップ！」…なによ…」

こいつバカなのか？魔法は成功してるだろうに…

「ルイズ、2つ質問がある」

「……なによ」

「まず1つ目、お前が魔法を唱えるとどうなるって？」

「どうって…爆発するのよ」

「そう、爆発だ、では本当に魔法が失敗したらどうなると思う？」

「それは…何も起きない…っあ！！」

「気付いたか？そう、何も起きないはずなんだ、だけど爆発が起きてる、まあ失敗と言うよりも間違ったやり方をしていると思うことだな」

「でも！！」「次に2つ目」…なによ」

「お前はどうかやって俺を召喚した？」

「どうって…サモン・サー…ヴァン…トで」

「気付いたか？お前の魔法は成功しているんだよ。どんな形にせよな…お前はもつと自信を持て、自分からできないと思い込むな。

お前はこれまで頑張ってきたんだろう？蔑まれながら、罵られながらも頑張ってきたんだろう？それで良いんだ…出来ないことなんてないんだ…お前はよくやってるよ…」

今まで馬鹿にされ続けたら心が折れるに決まってる。なのにルイズはここまで努力を重ねてきた。

裏でいろいろ言われながらも…だ。はつきり言ってそこはすごいと素直に思う。

「っ！！ふ、ふん！使い魔のくせにご主人様を励まそうなんて100年早いのよ！！」

素直じゃないなあ、まあ照れてるだけか…

「……ね、ねえケイト」

おお！！初めて名前で俺のこと呼んだぞ！！ちょっと感激。

「どうした？」

「あ、……ありがとう」

…………アレ？もしかして…デレた？サイトよりも早く俺にデレちゃ

った？

まてまで、それは困る、マジで困る、あの「烈風」のカレンなんか相手にするの嫌だぞ… サイトに行け、サイトに。

サイトいらないんじゃない？ 空気じゃね？ つか周りに言われてんだぞ。可哀想すぎるだろう。

確かに最近扱いに困ってきてモブキャラ化させようかなあ… と思ってるけども。

ん？ 何か今よくわからないことを言ってたな俺……

「さて、教室もキレイになったし、飯だ飯！」

「あつちよつと！ あんたご飯どこで食べてんのよ？」

「ん？ 厨房だぜ？ じゃ、行つてくらあ…」

「あつちよつと！ 待ちなさいよ！！… 行っちゃった。でも初めて人に誉めてもらったな… あいつは周りの奴らと一緒にだったけど… ケイトは違うのかな…」

― タツタツタツタツ

ん？ サイトじゃん。 ああ飯抜きだからどうしよう状態なのか。

「おお！！ ケイトか！ 助けてくれ！ 腹が減ったんだよう…」

「今回に限ってはかぎりなくお前のせいだな。 自業自得だ」

「だってよくスゲエム力ついたんだぜ？ お前は何とも思わなかったのか？」

「確かにお前の気持ちはわかる。だが俺達の価値観とここにいる奴らの価値観は全くと言っていいほど違う。だからルイズにとっては魔法が使えないっと言うことはあまり触れられてほしくない部分なのだろう。お前だって自分が凄く努力している事を否定されたら悔しいだろう？ム力つくだろう？まあ…そういうことだ」

「……………そうだな、ああ〜言い過ぎたな〜、どうしよう…」

「知るか、さつさと厨房いくぞ」

サイトはちゃんと反省しているみたいだな。俺も腹減ったし厨房行こう。

―移動中……

「シエスタ〜、いる〜？」

「ケイトさんじゃないですか、どうしたんですか？あれ？そちらの方は…」

「ああ、こいつは平賀才人、俺みたいに平賀が名字だからサイトって呼んでやってくれ、ム力ついたら通行人Aとか呼んでくれてもいいぞ」

「おい！もつとちゃんと紹介してくれよ！なんだよ通行人Aって！あつ平賀才人です。こっち流で言つとサイト・ヒラガかな？君は？」

「あつ、はい、シエスタと言います。よろしくお願いしますね、サイトさん、ところでケイトさんどうしたんですか？」

「俺は飯を貰おうかと、あとコイツの分も用意してやってくれないか。なんでもいいから」

「頼む！！シエスタ！ルイズに飯抜かれたんだ！」

「自業自得だな」

「ふふつ、では待っていてくださいね。すぐ用意しましたので」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「つぷはー！食った食った！おいケイト！！お前だけこんな飯食ってたのか！！ずるいぞ！俺にも教えてくれればよかったのに！」

「.....（無視）シエスタ何か手伝うことないか？ここまでしてくれたのに何もしないんじゃないから飯が食いにくくなるからな。」

なんでもするぞ」

「無視すんなやあああ!! あっ俺も何か手伝うぜ!」

「……………でしたら、デザート配膳を手伝ってもらえないでしょうか?」

「「まかせろ!」」

デザート配膳か…、端から順に配ればいいのか。

俺は徐々に配り終えたが…ルイズじゃん…何か言われるだろうな、まあいいか…やましいことをしているわけじゃないしな…、よしっ
!!

「デザートでございます、お嬢様」

「ッ! ……! あんた何やってるのよ!」

「ん? デザートの配膳だぜ? 飯を世話になったからな、いまお礼をしているところだ、直ぐ終わるから待ってろ」

「あっちょっと! 何なのよ! もう! …!」

「おい、サイトー、終わったか…、ん? 何やってんだ? あいつ」

「これは僕のものじゃないと言ってるだろう？給事君」

「いや、だってお前のポケットから落ちたし」

ああ、決闘フラグですか。まあ勝手にやってくれい。俺は巻き込まれたくないからね

「最低！！もうこれっきりにしてちょうだい！！」

ーパァン！！×2

おおー、いい音！

うわーほっぺにキレイな紅葉がさいてますねー
痛そー

もういいや、どうせ決闘になるんだろ。見ても仕方ないしさつさと残りのデザートを配るか…

……ん？決闘騒ぎ意外にもなんか騒いどころがあるな、なんだろー…

「行ってみるか…」

ータッタッタッタ

「う…ん…」

よかった、気がついたみたいだ。

「大丈夫か？シエスタ。待ってるよ？今すぐこのゴミを駆逐してくるからな」

「あれ？傷が無くなってる…、っ！…！ダメです…！ケイトさん！貴族様に逆らったら殺されてしまいます…！」

「はっはっは、シエスタ、何言ってるんだよ、………俺が殺すんだよ…」

コイツは殺す…生きる価値も無い……。

「貴様、貴族に向かってどういふ口の聞き方をしているんだ？」「うるせえよ、ゴミ」っな…！もう許さんぞ…！決闘だ…！」

上等だ…シエスタを殴った報いを受けさせてやる…
誰だか知らないが…モブキャラなら殺しても原作には影響ないよな…

「上等だコラあ…！」

「ではヴェストリの広場で待っているぞ、逃げるなよ、平民（ニヤニヤ）」

誰が逃げるか……。

「ちよつとあんた…！何やってんのよ…！」

おお、急に現れんなや、ルイズさんよう

「ゴミ掃除だ」

「もう！あんだといいサイトといい！！なんで貴族に突っ掛かるのよ！！しかも相手はヴィリエよ！？勝てるわけないじゃない！！」

ふーん、あのゴミはヴィリエって言うのか、ゴミの癖に名前があるんだなあ。

「さつさと謝ってきなさい！！今なら間に合うわ！！」

「無理だ、「なんでよ！！」まあ聞け、あいつはシエスタを殴った、くだらない理由でな、シエスタは女の子だぞ？これだけで八つ裂きにしないやならない。しかもシエスタに世話になったしな、恩を返すという意味でもあのゴミを駆逐するしかないだろう」

「無理ですよケイトさん！！私のことはいいですから行かないで下さい！！」

「無理」

「これはご主人様の命令よ！！謝ってきなさい！！」

「却下、あのゴミに謝るくらいだったら死んだ方がマシだ、おい、ヴェストリの広場ってどこだ？」

「こつちだ平民」

—タッタッタッタ

「もう!!何なのよ!!なんで2人とも言つこと聞かないのよ!!」

「ケイトさんが…殺されちゃう…私のせいで…」

さて、ケイトは本当に殺されてしまうのでしょうか。まあそんなわけないけどね。

続く

第5話 決闘―前編（後書き）

あれ？ケイトが優しい…

なぜだ？

このままではルイズがケイトに惚れてしまう…

第6話 決闘―後編（前書き）

すみません！更新おそくなりました！
リアルの方が少し忙しくて…

この前バイト先の店長にム力つくことを言われました…

「君はねえ、動きが遅いんだよ！！あと3倍は早く動いてくれないと困るんだよ！！3倍は！！」

はい、プチンとききましたとも、しかし、大人になり、思い止まっ
てこう言いました。

「俺赤くないんで無理です！！！！」

ええ、このあと説教されましたよ？
もう嫌ってほど。

ホント勘弁してほしいです…

第6話 決闘―後編

「決闘だ！！ヴァリエールの使い魔とギーシュが決闘をするぞ！！」

どうも、有馬恵斗だ。

そういえば忘れてたがサイトも決闘するらしい。

俺としては早くあのゴミを駆逐したい。だからさっさと終わってほしいものだ。

ギーシュがキザなこと言ってやがるな……、まあ俺にはどうでもいいが。

少し時間が経った。はつきり言ってサイトはボコボコにやられている。

当たり前だ、いくらガンダールブといっても武器を持っていなければただの一般人だ。

ちよっと喧嘩に自信がある程度だったら返り討ちにあうのが普通だろう。

クソッ！早く剣をとりやがれ！しかたない…あまり原作に介入しなくなかったが……

「サイト！！これを使え！！、武器を使ってもいいよなあ！？」

「ふんっ！いいだろう結果は変わらないと思うがね」

俺は地面から適当に錬金した剣を渡す。

所詮決闘レベルなので切れ味はあくまで普通にしておいた。

「……!!? ……体が…軽い!?!?これならいける!?!」

サイトが武器を取った瞬間今まで一方的にやられていたのが嘘だったのかのように金髪の鍊金したゴーレムを斬っていく。

一閃。サイトが放った斬撃によってゴーレムの上半身と下半身がゆっくりと離れていく。

「うわああああ!!?!?!?」

サイトの変わりようにギッシュは混乱し、次々にゴーレムを鍊金していく。

しかし金髪の抵抗むなく次々と斬られていき、遂にサイトは切っ先を金髪の首筋に向けていた。

「ま、まいった! 僕の負けだ」

「ワアアアアアア!?!?!」

貴族が平民に負けた。それによって観衆は湧いている。

貴族にとっては平民との差は絶対。それは貴族にとっては埋めようのない差であると考えている。

魔法は貴族にしか使えない、ということになっているからだ。

だから平民が貴族に勝つというのはありえない。それでもサイトは勝ったのだ、観衆が湧くのも当然だ。

さて、次は俺の番か……、派手に魔法でいくべきか…それとも武器を使って殺るか…、どうすっかな…

〈コルベール side〉

「勝ちましたね……」

今私はオールド・オスマンといっしょに遠見の鏡で使い魔の少年の戦いを見ていた。

「うむ、武器を取った瞬間に動きが変わったのう」

「やはり、彼らはガンダールブなのですね……」

遂先ほどまで満身創痍だったのに関わらず、剣を持った。ただそれだけで勝ってしまったのだ。

「ぬ？もう1人の使い魔も決闘するようじゃな」

彼が！？見たところ只の平民でしたが…

あの時感じた殺気が本物だとしたら…

「オールド・オスマン！！『眠りの鐘』の用意をするべきです！」

「所詮子供の喧嘩じゃ、大丈夫じゃろう」

本当に大丈夫なのか…？

いやしかし…實力を見るにはちょうどいいか…

彼は本当に只の平民なのだろうか…

side end

ケイト side

さて、サイトも無事勝ったし俺の番か…、とりあえずサイトの怪我は治しておいたが…、たしか3日？は目が覚めないんだよな…
まあ死ぬわけじゃないし大丈夫だろう。

「おい、平民。次は貴様の番だ。ギーシュは負けたがギーシュはドット。僕より下だ、誠心誠意謝れば許すのを考えなくもないがどうする」

「あ、別にいいです、あなたみたいな女の子に手を出すゴミ、クズ、人間の底辺に属するクソに謝るくらいならパラシースーツ無しでスカイダイビングしたほうがましですから」

わざと丁寧に言って煽ってやった。ほれ、さっさとキレてこっちこい。

「な、なんだと…！平民の分際で…！もう許さんぞ…！」

許されるつもりはさらさらねえよ。早くしろよ、俺はもうキレてんだぜ？

「ちょっと待って！！」

んだよ、誰だよ。ああルイズか…、まあこのタイミングで話しかけるのはルイズしかいねえよなあ。

「あん？どうした」

「どうしたじゃないわよ！！今すぐこの決闘をやめなさい！！あんたもさっきの見たでしょう！！？」

サイトは勝ったけど…ドットのギーシュ相手でアレなのよ！？ヴィリエはギーシュよりも上なの！！あんた本当に殺されちゃうわよ！！」

あー、うるさいなー。

もう殺ることは決定してんだよ。俺が負けるわけねえだろ。

「いいんだよ？平民の使い魔君。決闘を無しにしてみても。まあ『ゼロ』のルイズの使い魔だから常識がないのはしかたないことだね、ハッハッハッハ」

ほら見る、さつきさんざん挑発したのに余裕を取り戻しちゃったじやねえか。

ああもう、ゼロって言われて落ち込むくらいなら最初からこっちなよ。

「ルイズ、まあサイトもあんだだけやられてたんだから不安になる気持ちはわかるが…決闘は止めんぞ?」「でも!!!」落ち着けて。俺は何も死に行くわけじゃない。まあ見てるって、無様に地面に這いつくばるアイツの姿を見せてやるよ」

ったく、早く殺りたいんだよ、どっか行ってる。

「さて、さあ始めようか、ほれ、来な」

「貴様…嘗めてるのか?言っとくが僕も魔法を使うんだぞ一撃で死ん「いいから早よ来いやゴミ」!!!!もう許さんぞ!!!ラナ・デル・ウインデ!!!『エアハンマー』!!!!」

ドオオオン!!

ヴィリエの杖から放たれた風の塊はケイトに直撃した。余波の風によって砂埃を撒き散らされている。

「ハハハ！！！平民が調子にのるからこうなるんだ！！やっぱり『ゼロ』のルイズが召喚したのに相応しい使い魔だったなあ！！」

人1人を殺しておいて何も感じず、何も思わない。

「只の平民だから」それだけで、貴族の道楽で殺してもいいと考えられているのだ。

「あ、あ、あああ……」

ルイズは言葉にもならずそれを見ることしかできなかった。

ルイズのことを初めて認めてくれた人物。

魔法が使えないと知られたら使い魔をやめられてもおかしくなかった。しかし、ケイトはあろうことか何も言わず、さらには励ましてさえくれたのだ。ルイズにとっての家族以外の初めての理解者、それがあつけなく殺されてしまったのだ。彼女の精神的ダメージは計り知れない、が、しかし…

「おいおい、もう終わりかあ？せつかく何もしないで置いてやったのよオ」

「ッ！！！！！！！！！！」

彼は無傷で立っていた。何もせず、ただ、立っただけ”。観衆は何が起こったのかわからずルイズも、攻撃したヴィリエでさえもこの状況が理解できなかった。

「ったくよオ、もうちょつと期待してたんだぜ？ほれ、後1回だけチャンスやるよ。来な。」

（さて、このチートボディの限界を知りたかったからわざと攻撃を受けてやったが……話にもならんな。まあ所詮ラインか、スクウエアクラスになるとやってみなわからんが……多分余裕だろう。蚊に刺されたかと思っただぞ、後1回だけ受けて判断だな）

「貴様！！何をした！！」

「何もしてねエよ、ほれ、チャンスは1回なんだ、早く来ないと殺すぞ？」

「ッ！！！！デル・ウィンデ『エアカッター』！！！！」

ゴウッ！！と風が吹きケイトに向かって行く。この魔法は殺傷力が高い、平民がくれば防ぐ手立てがないので死んでしまうが……、生憎この男は普通ではない。

「まあこの程度か……、お前……覚悟しろよ？女の子殴るわ暴言は吐くわ差別はするわ、……救いようがねエな。まあいいや、『正宗』来い。」

ケイトの体には傷1つ付かず、さらにケイトは身の丈より大きく、

2メートルを優に越えるであろう刀を持っていた。

「あの平民急に剣が出てきたぞ！？どういうことだ！？」「おつきい剣！」「やっぱりメイジ…いや、先住魔法の使い手なんじゃ！？」皆思い思いに好きなことを口にして行く。

「貴様！！それをどこから出した！！」

「うるせエよ、ピーチクパーチク、ちょっと黙ってる。…おい！ルイズ！」

「……………っえ？！！あ、うん、えっと、何？」

ルイズは今何が起きているかが理解できていない。当たり前だ。魔法が直撃したのにも関わらず無傷。剣もどこから出したのかわからない。

もう頭がパンクしそうだったのだ。

「あいつってさ…本気で殺ってもいい系？それとも半殺しじゃないとダメ？」

「……………も、う……任せる……わ…」

いい加減頭が痛くなってきたルイズであった。

「よっしゃー!!……そうそうルイズ、おもしれエもん見せてやるよ。
(この前はできた……まあできるだろう)」

……………『リユニオン』……」

ケイトが言葉を呟いた瞬間ケイトから漆黒の翼があらわれた。
もうわかりだろう、身の丈よりも大きい刀。

天使を証明するような翼。色は漆黒で片翼のみだが…

そう、某チヨコボ頭の元ソルジャーの宿敵である人物だ。もちろん
BGMは『片翼の天使』だ。

皆が驚き、目を見開いている。人間じゃないのか?もしかして天使
?など好きかって言われている。ヴィリエはケイトの威圧感から顔を
真っ青にしている。

「さあ、始めようか」

ケイトが声を掛けたのと同時にヴィリエが正気になり魔法を放ってくる。

「ふんっ!!」

それを飛ぶ斬撃で逆に切り裂いて行く。某麦わら帽子のクルー、緑頭の煩惱咆も真っ青である。

「クソッ！クソッ！！エアカッター！！エアハンマー！！」

ひたすら魔法を放つヴィリエ、だがしかし当たらない。当たりそうになっても剣でいなされる。無論ケイトはこれでもかというほど手加減をしているのだが……

「もういいや、飽きたよ、お前」

ケイトがそう言った瞬間その場から消え、ヴィリエの後ろに現れた、もちろん只早く動いたただけだ。

そして正宗でヴィリエを斬りつける。ケイトのガンダールブの力も合わさって人間とは思えない動きを繰り出していた。

「イツ！！ギヤアアアア！！！！痛い！！！！痛い！！！！」

貴族は平民と違って体をあまり鍛えない。それは自分達は魔法が使えるからという慢心にすぎない。だから痛みにも慣れないのだ。

「ハッハッハッハ！！痛いカア！？苦しいカア！？辛いかア！！だが、シエスタを殴り、なおかつ一応俺の主人であるルイズを馬鹿に

する始末……万死に値する！そしてなにより…俺が気に入わねえんだよオ！！」

ケイトは思うままに刀を振るいヴィリエを斬りつけていく。決闘などではなく、もう一方的な虐殺になっている。

「痛い痛い！！！！僕が！！僕が悪かったから！！お願いだ！許してくれ！！降参だ！！降参するから！！何でもするから！！許してください！！助けてくれえ！！」

何でもする、といった瞬間にケイトの動きが止まる。

「ほう？なんでもか…じゃあそうだな…シエスタに謝罪の金を持って土下座して謝ってこい、あとルイズにもだ。土下座だぞ？誠心誠意謝ってこいよ？またふざけた態度取ったら殺すからな？わかったか、ああ！？」

「わかった！わかったから…、頼むよ…殺さないでくれ…」

よし、これで解決だ、こいつから謝罪させないといみないからな。しかし…ちよつと目立ちすぎたか？

やっぱり翼出さない方が良かったかな…

ギャラリ―も皆恐ろしい物を見るような目で見てやがるし…まあいいや、疲れた、帰る。

「ルイズ、終わったぜ。帰るぞ」

「ちょっと！！あんたってそんなに強かったの！？しかもあの翼はなに！？どうやって剣を出したの！！？」

「あー、うつさいうつさい、今疲れてっから後でな」

あー、眠くなってきたな…少し寝よう…

～side end～

～コルベール side～

なんなんだアレは！！？いきなりとても大きな剣を出したと思ったら翼が出てきた！？彼は人間じゃないのか！？

「オールド・オスマン！！やはり彼もガンダールブです、あのレベルの違いを見たでしょう！？今すぐ王宮に報告すべきです！！」

「それはならん」

「なぜ！！！！」

「ガンダールブが2人という時点で異常なのじゃ、王宮に報告などしたら虚無の再来などと抜かし戦争の道具にされるのがオチじゃわ

い」

「しかし…!」

「では聞くがあの気絶している少年はともかくあの翼の少年が素直に言うことを聞くと思うのかね?下手をしたらあの少年に潰されてしまっぞ」

「確かに…そうですね」

「最後に『炎蛇』としての君に聞くが彼に勝てると思うかね?」

「……いや、足下にも及ばないでしょう。彼はアレでかなり手加減していたみたいだし、私が彼に殺されるところしか想像できません……」

ミスタ・コルベールにこれ程言わせるとわ……

「まだ反抗的な態度はとってないみたいじゃし…経過観察じゃな」

「はい、そうですね、私もそれでいいと思います」

はあ…、ミス・ヴァリエールはまた厄介な使い魔を召喚してくれたの…

このまま大人しくしていてくれればたすかるのじゃが…はあ…気苦
労が絶えんわい…

続
く

第6話 決闘―後編（後書き）

はい！！あれですね！！セフィロスさんです！！

まあFFと付いてるからいいかなと思いディシディアのシステムを採用しました！！武器とかもポンポン出す予定です！！

感想・アドバイスお待ちしております！！

第7話 就寝（前書き）

夏休みだぜえ！！キャッホオオオオオイ！！！！

…失礼取り乱しました。

長期休暇っていいですね、でもやることバイトしかないんだよね
あ…

この小説ではサイトはFFもドラクエも知らないっという設定にすると
思います。そうしないとこれから先の話がおかしくなってしまう
ので…

では第7話です。
どうぞ。

第7話 就寝

「で、どういふことなのよ」

く ケイト side

俺は今ルイズの部屋にいる。少し疲れたのでふて寝を決め込もうとしたら、

「説明しなさいよ!!!」

とのことだったので非常に、素晴らしく、とてつもなくめんどくさいのだが説明することにした。ちなみにサイトは絶賛気絶中だ。

「とりあえず俺は、いや違うな、俺達は異世界から来た、おわかり？」

「……あんなの見せられたら信じるしかないじゃない」

よしよし、最初から理解すれば良かったんだが。

アレ見て信じなかったらさすがに黄色い救急車を呼ぶべきだと思う。異世界だけど。

「俺はその世界で普通に生活していた。魔法なんてものは存在していなかったしな」

「嘘よ!!!そんなのありえないわ!!!魔法が存在しないなんて」

「まあ聞け、その代わりに科学が基本だった、例えば空を飛ぶのは人自体ではなく機械、飛行機というものだ。金属、鉄とかだな、それらを使用してそれを作り空を飛んでいた」

「それが本当だとして…じゃあなんであなたは魔法を使えるのよ…あんたの世界には魔法は存在してなかったんでしょ？あんたは使ってたし…翼だつて急に生えたし…それが普通なの？あいつも結構強かったし」

「サイトは只の人間だ、あいつが武器をもった瞬間強くなったのはルーンの影響だろう。現に魔法という存在にあいつは驚いていただろう？俺たちの世界では魔法は架空の存在だったからな…、それで俺が魔法を使える理由だったか…俺はお前に召喚されるときにこの世界のことを教えられ力を与えられた、ちなみに俺の魔法はお前らの使う魔法とはちょっと違う。あの翼も…まあ魔法みたいなもんだ」

原作を知っているから、とは言えないし力を与えられたのは本当だからな説明はこんな感じで良いだろう。

「…じゃああんたは他にもできることがあるの？」

あつ！こいつ考えるの放棄しやがった。

「おう、いろいろできるぞ、燃やしたり凍らせたり吹き飛ばしたり治したり」

「…規格外ね…」

お前に言われたくねえよ、お前だつて虚無だろ、とは言わない。面倒なことになりそうなので。

「まあ俺についてはそんなもんだぞ、腕利きのメイジを召喚した、
って思えばいいさ」

「……………例えば…例えばだけど…あんたの使う魔法に爆発の魔法は
ある？」

「やっぱ来たか…確かに俺が使えたらルイズも魔法を使える糸口が見
つかるかもしれないしな。」

「ああ、あるぞ」

「ッ！…じゃあどうやったら私も魔法を使えるの！？あんたは使え
るんでしょ！？」

「まあ落ち着けて、だから俺が使う魔法はお前らの使う魔法と違
うといったろう？…………俺にはわからねえよ」

「……………そう……………」

「…なんかそんなに落ち込まれると罪悪感が…………。
ストレートに虚無って言えたらどれだけ楽か…………。」

「そう落ち込むな、ただ俺から言わせてもらうつとお前は魔法が使え
ないわけじゃないと思うんだよ」

「どついつことよ……………」

「前に教室で言ったが爆発が起こるということは魔法は成功してい
る、それがわかるか？」

「なんで爆発が成功なのよ」

「お前は多分精神力のコントロールがあまりうまくいってないんだよ、精神力を込めすぎて力が行き場を失い爆発が起こる…こんな感じじゃないかと俺は思う」

「…精神力の込めすぎ？」

「ああ、それさえうまく出来るようになったら多分だけど…お前は魔法を使えるようになると思うぜ」

ルイズは原作でも虚無に目覚めてからは簡単な魔法は使えるようになっていたはずだ。

今は無理かもしれないが俺の勘だとすぐにでも使えるようになるはず。

俺というイレギュラーもいることだしな。

「私は…魔法を使えるようになるの？」

「多分な、だが今までと同じようにやってたら絶対無理だ…まあ俺も手伝うからな…地道にやってこつぜ」

「…手伝ってくれるの？」

「使い魔だしな、一応」

「……………」

「さっ、俺はもう疲れたから寝るぞ、洗濯はやつとくから洗濯物はその辺に置いてくれ。あつ、あとサイトをさつき見てきたが多分しばらくは起きないと思うぞ。まあ回復はやつといたから気にすんな、じゃ、おやすみ」

「ケ、ケイト!!」

「…どうした？」

「えっ、えっと……ありがとう……」

「急にどうした……」

「だって…私のこと馬鹿にしかつたし…魔法のことだって…」

「気にすんな」

「でも……」

「気にすんな」

「…わかった…おやすみ」

「ああ、おやすみ」

＼ルイズ side＼

ケイトは私を馬鹿にしかつた。それも同情でもなく哀れみでもなかった。

私は魔法を使えると言ってくれた…

こんなことを言ってくれた人は初めてだ…
もしかしたらケイトが手伝ってくれたら本当に魔法が使えるようになるかもしれない…

私はあいつらを召喚したときにはスゴくショックだった…平民を召喚して…また周りに馬鹿にされるのかと思った…

けどあいつらは貴族と決闘をして勝った。

しかもケイトは圧倒的に…

私は誰よりも良い使い魔を召喚したと思う。

それに…翼を出して闘っていたあいつは…そ、その…スゴくカッコよかった…ノノって何言ってるのよ私!!

あいつは使い魔なのよ!!

…でも…あいつらにも家族はあったんだろうな…

あいつらは私のことをどう思ってるんだろう…

もし私が知らない所に1人で行って知ってる人が誰1人いなかったら…家族に会えなくなったら…

やだな…考えたくもない…

こんど謝ろう…帰る方法も探してあげなきゃ…

………帰り方がわかったらあいつも帰っちゃうのかな…やだな…

今考えてたって仕方ない…もう寝よう…

明日はケイトに魔法を見せてもらおうかな…

side end

第7話 就寝（後書き）

ルイズ陥落！！ですねえ。

この小説でのサイトの扱いは

1・オリキャラの女の子と

くつつく

2・アンリエッタがサイト

に惚れてくつつく。

ウェールズはマダオ。

娼婦館に通っている。

3・帰還

のどれかにしようと思っています。

1、3はまあそのまんまです。

2はアンリエッタがアホ化、ウェールズは本格的にマダオになります。サイトもヒモ化します。

1、2、3のどれかだったら書けます。

なのでどれがいいか選んで欲しいと思います。

俗に言うアンケートというやつです。

全部嫌だ！！サイトはあいつとくつついて欲しい！！ああなって欲しい！！つという人もお答え下さい。

いろいろ考えてみたいと思いますので。

アニエスは駄目です。なんかケイトとアニエスの絡みはネタが作りやすいのです。…なぜだ？別に好きというわけではないのですが…
…（嫌いじゃないですよ

期間は8月1日までにしたいと思います。

アンケート数が少なかったら作者が適当に決めたいと思います。

第8話 午前（前書き）

今回は駄文です。

正直読まなくても大丈夫です。

設定は正直適当ですのであまり気にしないでください。

では第8話です。

どうぞ！

第8話 午前

使い魔の朝は早い。只の使い魔なら関係はないが人間というだけで生活のリズムは違ってくる。

＼ケイト side＼

ん？…朝か…えゝつと、あ、そうだサイトがないから俺が洗濯を全部しなきゃいかんのか…、メンドクセ…

ルイズは…はい、寝てやがりますね、自分だけモフモフのベットで寝やがって…、固い床で寝てる俺の気持ちを少しは考えやがれ！

まあいいや、とりあえず洗濯だ、下着とかは洗いたくないんだけど…
…そうも言ってられないしな…

シミとか付いてないよな…、あゝサイト早く起きねえかなあ…

………

………

………

………

………

…

で、今は洗濯をしているわけですが。

…これってウォータとエアロを組み合わせたら簡易洗濯機みたいになるんじゃない？でも俺はまだ魔法の使い方に関してはお素人だ…戦

失敗したわ！！！！

ふざけんなよマジで！！軽くウオータをやったさ、そしたら2メートルくらいのちょうどいい大きさの水の塊がでてきたよ！おお！俺うまく調整できてる！と喜んださ！

次にウオータを維持しながらエア口をしようとしたんだよ…これまじで難しかったんだぜ！？んでエア口をウオータにぶつけたんだよ、そしたらちっちゃい竜巻みたいなのができた。

できた！簡易洗濯機できた！って喜んだよ、後は洗濯物をぶち込むだけだ。やったね♪、とか柄にも無くはしゃいだよ！だって自分流の魔法が使えたんだぞ？嬉しいだろ？

……洗濯物の中に入れたらどうなったと思う？

………弾けたんだよ！！！！

『パンツ！！』とかいいながらな！！

おかげで俺はびしょびしょだし、洗濯も最初からやりなおしじゃ！クソッ！もっと魔法が使えるようになってからリベンジだ！！…

固形物が入ったから駄目だったのか？その辺も考えるべきだったか…

ってあつちにいる女の子は………シエスタじゃん、まあメイドだし朝起きるのも早いよな

ちよつと声かけてみるか。ちゃんとあの…え…つと…あれ、あいつ、誰だったっけ…。

まあいいや、あの貴族が謝った来たか気になるし。」

「おゝい、シエスタやゝい」

シエスタ side

…いったい彼は何者なんでしょう？

私が最近いつも考えているのはそう、使い魔としてやってきたケイトさんのこと…

初め会ったときは私たちと同じ只の平民の方かと思った…けど彼は私を庇い、貴族の方と決闘し、尚且つ勝ってしまった…、私はケイトさんが殺されると思って怖くて見れなかったけど…彼は無傷で勝ってしまったそうなのだ。しかも決闘をした貴族の方は必死の形相で私のところに来て謝ってこられた…お金までもって…

あれは謝罪というよりも…恐怖だった…何に怯えていたんでしょう…

……彼もメイジなのだろうか？彼も…他の貴族の方と同じように平民を見下しているのだろうか…

…いや、そんなことはない…彼は優しい人だ…彼は私の為に怒ってくれた…その時は…スゴく、そう、スゴくカッコよかった／＼

ケイトさんのこともっと知ってみたいな…

「お…い、シエスタや…い」

…この声は…ケ、ケイトさん！！？こ、こんな朝早くにどうしたんでしょう？

いや、ちょうどいいですね、お礼も言いたいですし。…ふふっ

＼side end＼

＼ケイト side＼

なんかブツブツ言ってるな、考え事でもしてんのか？…あ、やっと気付いたっばいな、さて、行くか。

「おはよう、シエスタ、朝早いんだね」

「おはようございます、ケイトさん、ケイトさんも早いんですね、どうしたんですか？」

「ん、一応使い魔だからな、洗濯だ」

「洗濯…ですか？」

「おう、サイトも寝てるしな、俺がやらなきゃいけないんだよ…」

「そうですか……なら私がやりますよ？本来なら私達がやるものです」

「いいの！？…いや、やっぱりいいよ…シエスタの仕事が増えるだろう？」

「いえ、あんまり変わらないので大丈夫です。…それより…決闘の時見に行けなくてごめんなさい…。貴族の方はどうしても怖くて…でも、ケイトさんのおかげで平民でも頑張れるんだ、と思うようになれました！本当にありがとうございます！」

おおう、急にどうしたんだ？やけにキラキラした目で見てくるが…。俺は当たり前のことをしただけだし貴族の餓鬼をぶちのめしたただけなんだが…。まあお礼は言われても損はしないし喜んでくれると俺も嬉しいしな。

「いやいや、別にいいよ、大したことじゃないさ、…じゃあ洗濯お願いできるかな？さっき色々失敗しちゃって…」

「（失敗？）はい！構いませんよ？では、ケイトさん、また。あつ、そういえばなるべく早く厨房に来て下さいね？ケイトさんとサイトさんにとっても会いたがっている人がいますので」

ああ、あのおっさんね…サイトが目え覚ましたら一緒に行くか

「ああ、わかった。それじゃあな、シエスタ」

「はい！ではまた！」

いんやゝ元気な娘だこと。洗濯は正直助かったな…
もうやる気がどん底だったしな…

…もういい時間だしご主人様を起こしに行くとするかね…。

「へい、ご主人、朝だぜ起きやがれ」

さすがにもう起きてると思ったんだが…なぜまだ寝ている…。

「おい」

……………イラッ

「さっさと起きやがれゴルァ！」

いつまで経っても起きないので右手をベットに叩きつけた。
ルイズはポーンと跳ね上がりすぐにまた落ちた。

「んふぁ！？な、なに？なんなの？」

さすがに起きたか。混乱してんな…。フハハハハ！いい気味だ！魔法で失敗してストレスがたまったが今ので大分スッキリしたぜ！

「朝だぜご主人」

「あんた！もうちょっとまともに起こしなさいよ！！」

「起こしても起きなかったお前が悪い」

「くっ！（正論だから言い返せない！）」

「授業遅れるぜ？行かなくていいのか？」

「え？……っ！！もうこんな時間じゃない！もっと早く起こしなさいよね！！遅刻しちゃうじゃない！」

うるさいな…、こいつはあー言えばこー言うなあ……。そういえば…、授業ってまだついていかなきゃいكانのか？聞いてみるか…

「ルイズ、授業ってまだついていかなきゃ駄目か？」

「……もうお披露目はすんだから大丈夫よ、使い魔は授業は受けなくていいから外で遊ばせてるやつとかもいるしね」

まじでか、ふっふっふ。ついにアレを作るときがきたようだな…。

「じゃあ俺も外にいるな。あそこにいると疲れる」

まあ決闘騒ぎのおかげで喧嘩を売ってくるやつもいなくなると思
うけどな。……まあ喧嘩売られたら買うけど……。

「わかったわ。ご飯はどうするの？」

「厨房で適当に貰うわ、だから気にしないでいい」

「じゃあちゃんと戻ってくるのよ」

俺がどこ行くと思ってんだよこいつは……行くあてなんか無いから
どこにもいけねえよ……。

まさか逃げると思ってたのか？

「はいはい了解、じゃあな」

俺はそう言って部屋から出る。

とりあえずやりたいことは沢山ある。時間をかけてこなしていくこ
とにしよう。

《第9話 午後》に続く

第8話 午前（後書き）

まあいきなり同時に2種類の魔法を使うことはケイトにはまだ無理です。

チートだけど戦術や魔法の使い方は特訓させます。

もちろんあの人と（ニヤリ

あとアンケートの結果ですが1番と3番を視野に入れて考えていきます。

アホ姫は無しの方向で…

まあイラッと来るのは変わりがないですけど。

この文を中途半端に切ったのは無駄に長くなるからです。

すいません…作者の力量不足でした…

では、次回もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1915u/>

使い魔になれ!?めんどくせー・・・

2011年8月16日16時49分発行